

にいがた

北から南から



紙芝居で長岡空襲を

伝えたい

田口 孝

市政だよりに長岡戦災資料館主催の「長岡空襲紙芝居演者養成講座・全5回」の募集案内を見つけた。私はかねてから地域に根差し

て長く続けられる長岡空襲に関する活動をしたいと考えていたし、紙芝居というのも魅力だ。子育てをしていたころ、子どもたちに紙芝居をしてあげると、絵をじいっと食い入る様に見つめていた。家の出来事を紙芝居にしてお話してあげたこともある。芸術く紙芝居を通してならどんな人ともつながりあえるような気がする。

長岡空襲は8月1日22時30分125機のB29爆撃機が襲来して死者数1488人、消失

戸数11986戸長岡の町の8割が消失した。小中学生も280余人が犠牲になり戦後教職員組合中心になり平和像が建立された。長岡市は戦争を語りつぐために今から15年前に戦災資料館を作り資料や証言の収集、展示など行つて空襲を伝える活動を行つてきた。しかし戦後74年が過ぎ、体験者が高齢になり語り部は今では10人前後まで減少。そこで市が考えたのが紙芝居だ。視覚に訴える力があり、誰でもが語り部になれる。

紙芝居「みちこのいのち」は空襲から逃げ惑う中、おぶっていた1歳の娘を亡くした女性の実体験を題材にしている。まな娘を守れなかつた母親の無念が描かれている。今井和江さんがまとめ、諸橋精光さんが絵にして作品が出来上がっている。昨年完成して紙芝居は市内の小学校へ配付された。

さて紙芝居講座。そういえばここ数年紙芝居なんてしてない。しかも日本昔話のようなものとは全く異なる重い内容。5回も通いきれるのだろうか。上手な人ばっかりだったら



恥ずかしいなあ……。期待と不安を抱えて私は参加した。

1 回目

会場は長岡市戦災資料館。受講者は女性7人。参加した動機を聞くと、

・ 以前子どもと一緒に聞いたことがあるから
・ 七里さんと同じ町内に住んでいるが戦争を知っている人が少なくなつてしまい、このままではいけないと思つたから、

平和のために何かしたいから

など平和の意識が高いと感じた。新聞記者やカメラマンなど報道関係者も大勢来ていて、長岡空襲を次世代に継承する責任を地域社会がしっかりと持つていることを証明していた。

最近、日本と周辺国との外交がぎくしゃくしていたり、憲法9条を変えようと首相が公約に掲げたりして、「なんか、おかしいぞ。危ないぞ」という危機感を持つているのではないのかと感じた。

講座は戦災資料館館長のあいさつの後、講師から紙芝居の特徴、可能性、演じ方などの

レクチャー。後半発声発音練習。「ハイ、皆さん立ってください。腹式呼吸と発声と発音の練習をします。ハイ、息を吸つて…ハイもつともつと……」。「ハイ、腹から声出して……、はい、アカイエ、アオイエアイウエオ。カキノキ……」。「ハイもつと大きな声で……、出ますかあ……」講座は夜7時から始まるのだが、私は1日の仕事の疲れが最高潮に達している時間帯。「うわっ。大変なとこに来ちゃったな……」というのが実感だった。しかし講師の演じた紙芝居「みちこのいのち」を見て、紙芝居の持つ表現力、力強さを感じ、私もできるとなりたいと思つた。

2 回目

この日も腹式呼吸とか発声発音の練習からスタート。私は思い切つて「先生、あのおう、私疲れていて、大きな声出したくないなあという気分です……あんまり、…喋るのも、今は、ちよつと……」と言うと周囲の人が「とんでもない人がいるわ」とこつちを向く。もしここが学校だったら先生に大目玉だ。しか

にいがた

北から南から



し講師の先生は何と言ったと思いますか？
「はい。そうですね。普段こんなことしない

ですもの。無理しないでください。倒れたら大変です」。こういう懐の深い人がいてこそ市民活動が続いてるのだと納得した。

今日の内容は演出方法。1枚1枚情景、登場人物の感情、言葉に込められた七里アイさんの願いなど教えてもらった。最後に東京空襲を扱った紙芝居を上演してもらった。空襲で女の子が亡くなってしまふ悲しい話なのだが、長岡との違いは絵、特に炎の表情だった。逃げ惑う人の命を焼いていく圧倒的な炎。きつと地獄の炎はこうなんだろうと思った。

3回目

長岡空襲を理解する講座。長岡市が作成したDVDを見たり、紙芝居のものになった女性の語りをDVDで見たり、空襲の時に11歳だったという方の実体験をお聴きした。空襲警報と警戒警報のサイレンの音の違い。焼夷弾が落とされた市街地は柿川に囲まれるようになっていて、この柿川を越えなければ信濃

川の土手まで逃げて行くことはできなかったという地理的条件。柿川に逃げ込んでも、焼夷弾の油が川面を覆い炎が移り川の中で多くの人が焼け死んだこと。「助けて！」という人に対して何もできなかったことにずっと罪悪感を持ち生きてきたことなどを聞いた。これまで分かっていたつもりだったけどそんなもんじゃなかったと反省した。

4回目と5回目

みんなの前で1人で演じ指導を受ける日。私もこの日に向けて家で少しずつ稽古してきた。私のイメージでは、焼夷弾攻撃の中を逃げる場面からはバツハのバイオリンコンチェルト第1番がぴったりだ。頭の中でこのコンチェルトの旋律を思い浮かべると緊迫感が一層広がっていく。そもそも私は人前で表現することが好き。

さて本番。少し緊張したけど先生や受講生の方や報道関係の方などの前で発表した。スピード感、紙の抜き方、警戒警報と空襲警報の表し方、子どもを失った時の母の悲しみ、



声の質など山のように指導を受けた。どれも納得。教えてもらうのって楽しいなあと感じた。5回目最終回は発表を聞きあつた。皆さんの上演はその人らしさが出ていてどれも魅力的だった。

私がこの紙芝居養成講座に通っていることを職場（長岡豊学校）で話したところ、「8月前に子どもたちに見せよう」「手話が必要」「じゃ誰がする?」「表現力が必要だからA先生が得意だよ」「事前の打ち合わせはいつする?」とトントンと話しが進み、夏休みが間近かに迫ったところに紙芝居をした。私が人前でするのはこれが2回目という不十分極まりないのだが、子どもたちの視線はくぎ付けになった。豊学校のすぐ近くで本当に起きた話であり、特に柿川には子どもたちはよく魚釣りに行っているなじみ深い川だ。紙芝居舞台の横に立ったA先生の手話表現が素晴らしかったことと何よりもこの紙芝居の訴える力が圧倒的だったからだ。6年生児童は「町や家が爆弾で燃えたり壊れたりして、人がたくさん

死んでかわいそうな話でした。みちこが死んだときのお母さんはとてもかわいそうでした。戦争はもうなくなつてほしいです」と感想を書いた。私は一番身近にいる子どもたちに披露することができて本当にうれしかった。

講座の最終日に、戦災資料館ボランティアとして紙芝居を続けてほしいという話があり、受講者の多くが、ボランティア登録をした。実は、私は小学生のころ祖母から、空襲の時布団をかぶつて逃げたこと、布団に火が付くブスブス燃えたことを何度も聞いた。戦争の話聞いて育つた私の責任としても紙芝居を続けていきたい。少し忘れかけてしまった祖母の顔を思い浮かべながらやつていきたい。

（たくち こう・長岡豊学校）